ISSN 2189-7476

森のちゃれんがニュース 2024 春

北海道博物館
HOKKAIDO MUSEUM

Newsletter vol.35

第21回企画テーマ展「森のちゃれんが宝箱 －スタッフ一押しの収蔵資料や博物館活動を紹介する展覧会、いや、展乱会!? －」の開催

北海道博物館では、第21回企画テーマ展を2月10日（土）に開幕しました。

本展は、30名を超える学芸員・研究職員一人ひとりが、各専門分野の資料を展示する企画。それぞれの個性が遺憾なく発揮された展示会です。

今回は、新型コロナウイルス感染拡大防止のためしばらく休止していた「ミュージアムトーク」が復活。職員が特別展示室内で自分の一押しの逸品について語りました。この解説を聞くと、また違った角度から展示が見えてきたのではないでしょうか。

（研究職員　吉川佳見）

ミュージアムトークのようす

CONTENTS

2 収蔵資料紹介
宝箱から飛び出した小さなお宝

3 総合展示紹介・第2テーマ
「ある家族の物語」のものがたり

4 研究活動紹介
植物化石や地学の楽しさを伝えていきます！

6 はっけん広場活動報告
わらで作るミニミニお正月リース
第21回企画テーマ展
「森のちゃれんが宝箱」を開催しました

7 アイヌ民族文化研究センターだより
Zoomを使った講座を開催しました

8 活動ダイアリー
2023年12月～2024年2月の記録

収蔵資料紹介

宝箱から飛び出した小さなお宝
―「ボラドーレス」の笛と太鼓？―

甲 地 利 恵
アイヌ文化研究グループ　研究職員

この太鼓（**写真1右**）収蔵庫で初めて出会ったときは、とても小さくて（直径約13cm）、カラフルなこともあり、一瞬「おもちゃ？」とも思いましたが、手の込んだ、演奏に耐えられるつくりの太鼓です。2020年の第17回企画テーマ展「楽器 見る・知る・考える」*1の準備中のことでした。

資料データベースによれば、メキシコの先住民族の民具とのこと。
（現在の北海道博物館では、「北海道及び北海道と関連の深い諸地域」の資料に収集対象を限定していますが、旧北海道開拓記念館の時代に収集された資料の中には、それ以外の地域のものが含まれていることもあります。）

ほかにもメキシコ先住民族のものとされる資料がいくつかあり、**写真1左**の縦笛もその1つでした。材料は植物で、吹き口はリコーダーと基本的に同じつくりですが、リコーダーよりも丈が短く、指穴が表裏あわせて3つです。

上述の「楽器」展で協力いただいた、楽器学とくに鹿笛研究の第一人者である枡谷隆男さんにみていただくと、この笛と太鼓とで1セットだろう、とのこと。英国～西ヨーロッパには、1人の奏者が同時に演奏する一対の笛と太鼓（英語では「パイプ・アンド・テーバー」）が、中世から伝わっています。また、世界の各地にもいろいろな「パイプ・アンド・テーバー」タイプの楽器がみられます。

当館の資料が同類とみなせる決め手は、笛に指穴が3つしかないこと。太鼓のバチを片方の手にもって打つため、笛はもう片方の手でしか操作できないので、指穴の数も限られてきます。なお、中が空洞で穴が最低3つあれば、穴をふさぐ組み合わせと息の強弱で、オクターブ以上のメロディを演奏できるということです。

＊　＊　＊　＊　＊

メキシコの先住民族のいくつかには、「Danza de los Voladores（ボラドーレスの踊り）」などの名で呼ばれる儀式*2が伝わっています。その儀式のあいだじゅう、小さな笛と太鼓とを1人の奏者が演奏し続けます。中には当館の太鼓と模様など外観がそっくりなものもあり、当館の資料はこの儀式で使われる楽器か、少なくとも同じタイプの楽器である可能性が高い、と考えられます。

この伝統儀式は、まず樹木を選んで切り出し（**写真2**）、高い柱にして立て（**写真3**）、供物をささげます。その後、4人の「ボラドーレス（＝飛ぶ人）」とそのリーダーが柱の頂上の回転する木の枠まで登ります（**写真4**）。4人はロープで逆さになって空中を回転しながら少しずつ降下し、やがて着地します。それまでのあいだ、柱の頂上ではリーダーが笛と太鼓を演奏し続けます。

深刻な干ばつを免れ、恵みの雨をもたらすハリケーンを招くとともに、それが暴れないよう制御し、自然界に敬意を表し祈るために、こうした一連の流れの儀式が、古くから伝えられてきたといわれます。

＊　＊　＊　＊　＊

ただいま当館では、第21回企画テーマ展「森のちゃれんが宝箱」を開催中（4月7日まで）。この笛と太鼓も展示しています。

ぜひ実物を見にいらしてください！

＊1　コロナ禍で開催中止、オンライン公開のみ。
＊2　UNESCO（ユネスコ／国際連合教育科学文化機関）の「無形文化遺産一覧」には、2009年に「Ritual ceremony of the Voladores（ボラドーレスの儀式）」の名称で記載。

写真１　笛（資料番号126176）と太鼓（資料番号126175）

写真２（※）　中央の木の後方に笛と太鼓の奏者（ボラドーレスのリーダー）が写っている。

写真３（※）　柱を立てるところ。笛と太鼓の奏者が右手前に逆光で写っている。

写真４（※）　飛びだす前のボラドーレスたち。中央に立つのはリーダー。

※写真2・3・4は、メキシコ国立自治大学でボラドーレスの儀式などを研究されているLuisa Villaniさんによる「The Voladores (Flyers') dance ceremony amongst the coastal peoples of Totonacapan - an aquatic ritual（2022,　ウェブサイト「Aztecs at Mexcolore」）より。Villaniさんにはボラドーレス儀礼についてご教示いただきました。記して感謝申し上げます。

総合展示紹介・第2テーマ

「ある家族の物語」のものがたり

小 川 正 人
アイヌ民族文化研究センター長

写真１　第２テーマ「アイヌ文化」の世界の入り口。左側が第２テーマのサインと「現在を知る」、右側に「伝統を学ぶ」、奥に「ことばを聴く」の展示コーナー。

１　総合展示第2テーマ「アイヌ文化の世界」の構成

当館の総合展示は5つの大きなテーマで構成されています。その第2テーマが「アイヌ文化の世界」です。

「アイヌ文化の世界」は4つの中テーマで構成しています。先ず「現在を知る」を置き、次に「伝統を学ぶ」(伝統的な衣食住などの生活文化や信仰・儀礼)、「ことばを聴く」(アイヌ語とアイヌ語で語られた文芸や芸能)、「歩みをたどる」(近現代の歴史)という組み立てにしています。先ず〈現在〉を考え、その上で伝統的な生活文化や伝承されてきた(あるいは、伝承されてしかるべきだった)文化を紹介し、その上で歴史をたどる、という順序を考えました。

２　現在を知るための「家族の物語」

「現在を知る」の最初のパネルの文章は、次のとおりです。

「現在のアイヌ民族の人口は数万人ともそれ以上ともいわれています。多くは北海道に住んでいますが、就職や進学、結婚などをきっかけに、東京や大阪など各地にくらしの場を移した人たちもたくさんいます。北海道でも、ここ札幌市をふくむ各地にくらしています。現代では、アイヌの人たちだけが住む村のようなものがあるわけではありません。現在のアイヌ民族は、日本のほかの人びとと同じ地域のなかで、ともにくらしているのです。」

写真２　展示の最初の部分。家族の紹介に続いて、物語が始まります。

解説として書けば、おおよそはこの文章のようになるのだとは思います。しかしこの文章だけでは、「日本のほかの人びとと同じ」というところだけが印象づけられるかもしれない。けれども〈現在〉を知るためには、そこまでの歴史、特に明治以後の厳しい歴史を経てきたことの理解が欠かせない、このことを、単なる歴史の話ではなく現在につなげて物語ること、何より、来館いただく方々に、この物語をなるべくたくさん見て／読んでいただきたい――そう考え、検討を重ね作ったのが、「ある家族の物語」です。

３　現在へと続く、ある家族の物語

物語の主人公は、いま札幌に暮らすある家族の、小学生の「ぼく」です。「ぼく」は、あるきっかけから、自分の家族の歴史――江戸時代の終わりごろから現在までつづく家族の歴史を、祖父母や父母から聞いていきます。家族の対話を追いかけていくことで、現在(いま)へと続く物語をたどっていただければと企図したのでした。

物語に登場するのは架空の家族です。しかし時代の背景やできごとは、実際の歴史をもとにしています。制作にあたっては、いったん細かく・詳しい物語を書き込み、そこから展示で取り上げる内容を選び出していきました。展示を作った側として、家族が経験した出来事の背景にあった、当時の施策や制度などはもう少し具体的に伝えるべきだったか、といった反省や、2024年の今であれば、ウエブ上で流通しているアイヌ民族に関する情報のあり方をこの家族がどう感じているか、というテーマは欠かせないな……など、日々感じることもあります。それぞれの時代の、それぞれの人びとが、どんな社会を、どのように生きてきたのか。それらをたどることを通して、北海道の歴史と現在を知り、考える素材になれば幸いです。

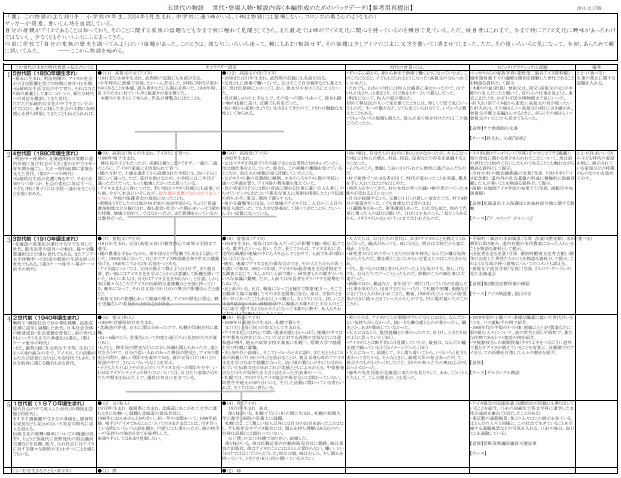

写真３　展示制作にあたり、家族の歴史をいったん細かく作り込んでみた検討資料です。

研究活動紹介

植物化石や地学の楽しさを伝えていきます！

成 田 敦 史
研究部自然研究グループ　学芸員

1984年、北海道生まれ。北海道大学大学院修了。2008～2021年度は高等学校教諭として勤務。博士（理学）。専門は古植物学と地学教育。左の写真は、化石採集に夢中になっている筆者。

図１　シラカンバに近い広葉樹の葉化石（*Betula protojaponica*）。糠平湖畔の680万年前の地層から採集。

植物の化石もある！

皆さんは、「化石」と聞いたらどんな古生物を想像するでしょうか？各種講演や授業などで同じ質問を投げかけますと、返ってくる答えとしては、「恐竜」、「アンモナイト」、「三葉虫」、「マンモス」などが大多数を占めます。少し詳しい方からの「アノマロカリス」や「始祖鳥」などの答えもあります。これらの古生物は、いずれも動物です。しかし、ここで声を大にしてお伝えしたいのは、植物も立派な化石になるということです。植物も化石になるの？という声が聞かれることもありますが、もちろん植物の化石もあります。あまり知られていないようですが、北海道からも多くの植物化石が見つかっています。

その化石の状態にもよりますが、葉脈がはっきりと残っている葉の化石（図1）や、細胞の配列が立体的に残っている材化石など、まるでいま生きている植物ではないかと見間違えるほど美しい状態の植物化石もたくさんあります。北海道で多産する石炭や花粉・胞子化石なども植物化石です。

植物化石を研究材料に、地質時代の植物の姿、植物の系統や進化史、古植生、陸上の古気候（大昔の気温や降水量など）などを明らかにしていく研究分野が古植物学です。私は大学生のころから北海道内の各地域・様々な時代の植物化石の研究を行ってきました（図2）。また、古植物学やそれに関係する地学全般の効果的な教育についても研究と実践を重ねています。今回は、私の行っている植物化石の研究と地学教育についてご紹介します。

植物化石から植生と気候を復元する

恐竜やマンモスゾウの姿を復元するには、当然ですがこれらの化石を調べる必要があります。では、それらの動物が生きていた時代に、周辺の陸上にはどんな環境があったのか、についてはどのように調べるのでしょうか？答えは、「化石が含まれていた地層や植物化石を使って調べる。」です。恐竜などの陸上動物の周辺にあった植生や陸上の気候は、植物化石から明らかにすることができます。

地質時代の植生や気候というと、「恐

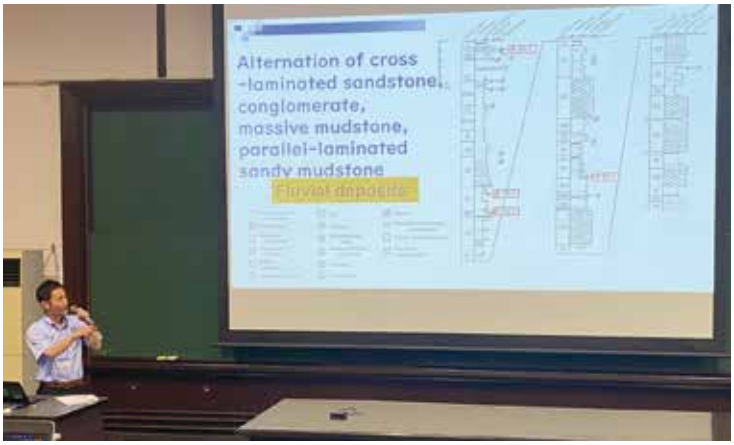

図２　左写真；国際学会で発表している筆者（2023年8月）。スライドは、本別町で見られる地層の積み重なりを表した図（地質柱状図）。
右写真；その図の基になった実際の地層の一部（斜交層理砂岩層）。

竜の時代にはソテツのような裸子植物が多く、気候は温暖でした」などとザックリとした推定はよく耳にするかもしれません。実際には、植物化石と地層の解析（図2）から、「9000万年前の北海道では河川付近の洪水の起きやすい場所にスズカケノキなどの広葉樹が、河川から遠い場所ではナンヨウスギなどの針葉樹林が存在した。」というような、より詳しい局所的な古植生も明らかにすることもできます（図3）。

古気候についても、葉化石の縁にギザギザがついているか、いないか、葉の先端は長く伸びているか、いないか、などの形を観察して集計し、数学的な手法を用いることで、過去の年平均気温が具体的に何℃だったか、降水量は何mmか…などのかなり詳細な気候条件の算出と解析ができます。すると、例えば1300万年前当時の北海道北部は現在よりも2〜3℃気温が高く、冬場の降水、すなわち降雪も多く、秋田県あたりのような気候だったこともわかります（表1）。これほど詳細が復元できるとは、かなりの驚きのことではないでしょうか。

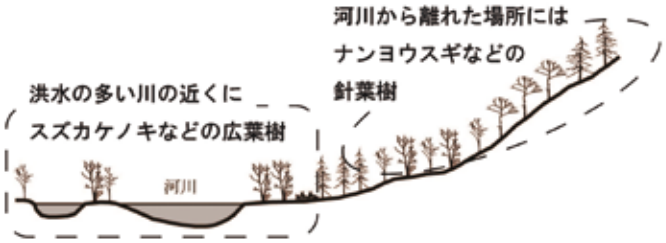

図３　植物化石と地層の解析から推定される後期白亜紀の北海道付近の植生のイメージ図（Narita et al. 2008などを基に作成）。

表１　葉化石群から計算された古気候データの例と、比較対象の現代の洞爺湖の気候データ（Narita et al. 2020； 成田・乙幡 2023より引用）

地域/植物化石群	時代	年平均気温(℃)	暖かい3か月間の平均気温(℃)	寒い3か月間の平均気温(℃)	気温年較差(℃)	年間降水量(mm)
洞爺湖	現在	7.7	21.5	-3.14	26.7	1280
十勝幌加(糠平温泉)	680万年前	8.4	20.1	-2.47	22.6	1336
湖南(士別市)	1300万年前	8.2	20.3	-3.10	23.5	1830

高山植物の祖先？の葉化石

現在、私は十勝平野の700万〜100万年前ころの植物化石群の研究に特に力を入れています。一部には新種と考えられる化石も含んでいます。これまでほとんど報告のなかった高山植物の祖先かもしれない植物の葉化石も見つかっています。研究の進展にご期待ください。

楽しさを伝える地学教育

私は小学校入学前から「恐竜大好き少年」でしたが、縁あって植物化石の研究を行うことになりました。動物化石では決してわからないような大昔の環境のことも調べられる植物化石の魅力にすっかりハマりました。こんなに楽しい世界を知らない人が多いというのはもったいない！という思いと、古植物学のみならず関連する地学の各分野にも関心が強かったこともあり、一度は高校教諭として教壇に立ちました。そのころの経験や古植物学の研究内容も活かすことで、年齢や関心に合わせた地学の各種講座や巡検なども積極的に行っています（図4）。

残念ながら現在の地学教育は充実しているとは言い難い状況です。だからこそ当館などを利用して、実物の化石や地層を観て、感じて、周りの世界の見え方が変わる体験が重要になります。その際、化石や地層を漫然と見て終わるのではなく、“視点を絞って”どこをどのように観察するかが重要なのです。また、教えすぎも逆効果です。そこで、「探究心」を高めるため、博物館資料を観察する様々な課題を学ぶプログラムやワークシートについても作成中です。例えば、実際の骨格を見て、「なぜマンモスゾウの方がナウマンゾウより体が大きいのか」、「なぜ歯の化石は他の部位の化石よりも多産するのか」、などを考えるようなプログラムです。このような探究を通して、見える世界が変わると、学ぶことも楽しくなってきます。視点を変え、「学ぶって楽しい！」と思えるような地学教育をさらに進めたいと考えています。古植物学の研究と並行して、地学教育の充実にも務めていきます。

図４　小学生に化石のレクチャーをしている筆者。

引用文献

・Narita, A., Yamada, T. and Matsumoto, M., 2008, Platanoid leaves from Cenomanian to Turonian Mikasa Formation, northern Japan and their mode of occurrence. Paleont. Res., 12, 81-88.

・Narita, A., Yabe, A., Uemura, K., and Matsumoto, M., 2020, Late middle Miocene Konan Flora from northern Hokkaido, Japan. Acta Palaeobot., 60, 259-295.

・成田敦史・乙幡康之，2023，北海道中央東部糠平湖周辺の後期新生代の古植生と古環境：後期中新世十勝幌加植物群と前期更新世タウシュベツ植物群．地質学雑誌，129，289-305.

はっけん広場活動報告

わらで作るミニミニお正月リース

山 田 日登美
学芸部道民サービスグループ　解説員

博物館の入口をはいり、エントランスホール右側の階段をさがって進むと、そこは「はっけん広場」。こんなことを体験できます。

北海道開拓記念館の時代からこの場所では年末になると、知る人ぞ知る恒例「しめ縄作り」が行われていていました。北海道博物館になってからも常連さんには、人気の「はっけんイベント」として継続しれていました。コロナ禍で「はっけん広場」が閉鎖されたことでこの企画も中止。この企画を「途絶えさせてはならない」との使命感で再開しました。

今回は、伝統的なしめ縄を少しアレンジしたミニリースづくり。短時間で気軽に参加できる内容で企画しました。大物のしめ縄を作るのは、大人の方でも汗をかくほどの力仕事ですが、初めての方や力の弱い方にも作りやすいようにしました。飾りも時間のかからないよう参加しやすい内容にしました。子どもから大人まで多くの方に参加していただきました。

写真１　飾りはアレンジ自由

飾りの部分は参加者がアレンジできるため、頭を悩ませる部分でもありましたが、沼にはまってしまった方も、試作でシュミレーションしてから飾りを制作することで簡単に楽しんでいただきました。慎重派の方や完成形をイメージしてリースを見つめたまま悩んでいる方も楽しみながら挑戦していました。

写真２　パパよりママより、僕が一番！

博物館に来られたら、今年も楽しい期間限定イベントを各種予定しておりまので、「はっけん広場」を訪ねてください。お待ちしております。

第21回企画テーマ展

「森のちゃれんが宝箱」を開催しました

池 田 貴 夫
学芸部長

北海道博物館の学芸員・研究職員が、過去に実施したクローズアップ展示（総合展示室に7か所設けられた展示コーナーで、テーマを決めて収蔵資料を定期的に入れ替えて紹介する展示）

の再展示、おすすめの一品、博物館ならではの活動紹介を行いました。2015年4月の北海道博物館の開設にあわせて実施した第1回企画テーマ展『学芸員　おすすめの1点　ようこそ北海道博物館へ』以来の、スタッフ紹介を兼ねた展覧会となりました。

企画段階で、どんな展覧会になるかは、正直、わかりませんでした。はたして、〈宝箱〉の空間となるか…。なにせ、それぞれの展示コーナーにおいて、スタッフそれぞれの関心が個々に表現される展覧会ですので…。ということもあり、タイトルの副題は「スタッフ一押しの収蔵資料や博物館活動を紹介する展覧会、いや、展乱会!?」となりました。

会期は、札幌雪まつりから春休みにかけて。寒い時期ではありましたが、おかげさまで多くの方々にご覧いただきました。今回実施した展覧会によって、北海道博物館が所蔵する資料の可能性や当館が実施している諸活動についてあらためてご理解を深めていただくとともに、当館で活躍するスタッフの関心や専門性についてお知りいただけたでしょうか。そして、その展示空間が北海道博物館の〈使命〉を道民の皆様とあらためて共有し、北海道の未来づくりへとつながる文字通りの〈宝箱〉となったならば、嬉しく思います。

写真　ただいま展示作業中！

アイヌ民族文化研究センターだより

Zoomを使った講座を開催しました
～アイヌ語講座オンライン「アイヌ語の物語を読む」（全６回）～

当館初の試み

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、オンラインで開催されるイベントが増え、その後、感染が収束に向かうなかで、現地とオンラインの双方で開催されるハイブリッド型の催しも多くなりました。感染症対策に限らず、天候に左右されにくいことや遠方からでも参加ができることなど、オンラインイベントにはさまざまなメリットがあり、ここ5年ほどの間で定番の開催形式になったと言えるでしょう。

当館でも、2023（令和5）年の10月から2024（令和6）年3月にかけて、連続講座「アイヌ語講座オンライン「アイヌの物語を読む」」（全6回）を開催しました。Zoomミーティングを用いたオンラインでの講座の開催は、当館として初めての試みでした。

こんなことをしました

本講座では、アイヌ語の物語をひとつ読み切ることを目標にしました。使用したのは、当館所蔵の久保寺逸彦採録資料にある散文説話で、音声の録音はありませんが、久保寺逸彦によるローマ字筆記のノートおよびタイプ製本（写真参照）での記録が残されているものです。このアイヌ語表記は、現在ひろく使われている表記方法と異なるところがあるため、講座で使用するにあたって講師側で表記を変更したものを用意し、現在普及しているアイヌ語の辞典で調べやすいようにしました。

今回は、「アイヌ語の学習書などで文法をひととおり学んだ方」という条件で受講の募集をし、8名の方が参加されました。受講者の皆さんには事前にアイヌ語のみのデータを配布し、予習として辞典などを使ってご自身で和訳を付けていただきました。それぞれ付けていただいた和訳は、講座中に各自Zoomのチャットで送っていただき、講師の和訳と照らし合わせたうえで、講師が文法や単語の解説を行うという流れで行いました。

1回あたり2時間（10分休憩を含む）の長丁場で、また、辞典に載っていない単語もしばしば登場するような物語資料を扱いましたが、皆さん真摯に取り組んでくださり、無事完走することができました。

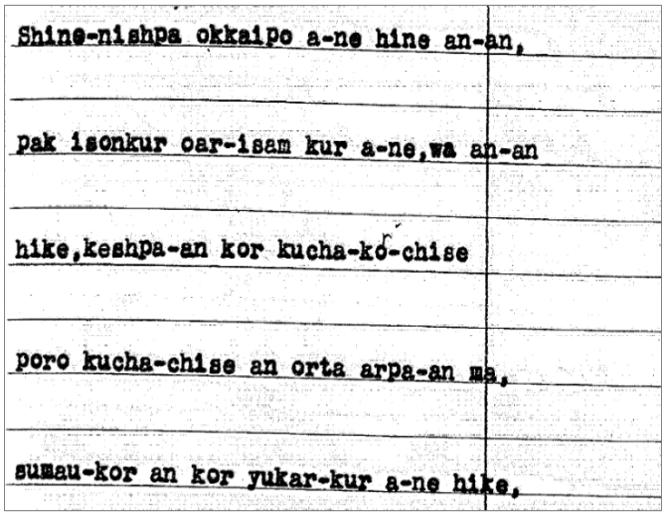
Shine-nishpa okkaipo a-ne hine an-an,
pak isonkur oar-isam kur a-ne,wa an-an
hike,keshpa-an kor kucha-ko-chise
poro kucha-chise an orta arpa-an ma,
sumau-kor an kor yukar-kur a-ne hike,

写真　久保寺によるタイプ製本（一部）　（収蔵資料番号177211）

それぞれの良さを生かして

今回は札幌市外や本州在住の方も参加されており、オンラインのメリットが生かされたように思います。特に、雪の降る冬期は、お近くにお住まいの方であっても遠隔で参加ができると便利かと思われます。

その一方で、現地で参加していただきたい行事があるのも事実…。当館ではさまざまな行事を行っていますが、その場で当館収蔵資料の現物を見たり、手を使ってものづくりをしたりするようなものは、現地でなければ行うことができません。また、行事の前後に当館の展示を観覧したり、講座の内容で気になったことを学芸職員に質問したり、すぐに図書室で調べたりすることができるというのは、現地開催ならではの魅力です。現地とオンライン、どちらの良さも生かしながら、当館行事を皆様に楽しんでいただけるよう努めていきたいと思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜講座概要＞
アイヌ語講座オンライン「アイヌ語の物語を読む」（全6回）
＜講師＞遠藤志保、吉川佳見
＜日時＞2023（令和5）年10月28日（土）、11月25日（土）、12月23日（土）、2024（令和6）年1月20日（土）、2月17日（土）、3月16日（土）
各回13:30～15:30
＜会場＞オンライン（Zoom）
＜定員＞20名
※本講座は終了しました。また、今回と同じ内容での講座開催については未定ですが、オンラインの行事は令和6年度も開催予定です。詳しくは令和6年度の当館「行事あんない」などでお知らせします。

（アイヌ民族文化研究センター
研究職員　吉川佳見）

活動ダイアリー

2023年12月～2024年2月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動です。

12月2日（土）～24（日）の土・日
■はっけんイベント「わらで作るミニミニお正月リース」をはっけん広場で開催。
講師：解説員

12月10日（日）
■連続講座「ちゃれんが地学講座②」を開催。
講師：久保見幸

12月16日（土）
■子どもワークショップ「化石を研究してみよう！」を開催。講師：成田敦史・圓谷昂史・久保見幸、**写真1**

12月16日（土）
■総合展示クローズアップ展示、1～5テーマを展示入替（①と②は、2月15日まで展示）。
①江戸時代終わりごろのイシカリ－村山家の文書と地図から－、**写真2**
②木戸竹石の《捕馬図屏風》
③アイヌの子どもの遊び歌－年寄りカラスはどうした？－
④モノから見るアイヌ文化－首飾りのいろいろ－
⑤職人の道具と技術－鍛冶職人－、**写真3**
⑥レンガ－日本の近代化を支えた建築材料－
⑦標本DNAのタイムカプセル

12月17日（日）
■ちゃれんがワークショップ「博物館で新年祈願!?　日本の画材で絵馬づくり」を開催。
講師：田中祐未・三浦泰之・水島末記

12月23日（土）
■連続講座　アイヌ語講座オンライン「アイヌ語の物語を読む③」を開催。講師：遠藤志保・吉川佳見

1月6日（土）～2月4日（日）の土・日・祝・振
■はっけんイベント「羊毛ボールでボンバンヨーヨーだよ－」をはっけん広場で開催。
講師：解説員、**写真4**

1月7日（日）
■ミュージアムカレッジ「ハレの日の装い」を開催。講師：亀丸由紀子・尾曲香織、**写真5**

1月13日（土）
■連続講座「はじめての古文書講座①」を開催。世話人：東俊佑、**写真6**

1月14日（日）
■特別イベント「博物館のウラ側を見てみよう」を開催。講師：鈴木琢也・櫻井万里子・高橋佳久・鈴木明世・鈴木あすみ、**写真7**

1月20日（土）
■連続講座　アイヌ語講座オンライン「アイヌ語の物語を読む④」を開催。講師：遠藤志保・吉川佳見
■連続講座「はじめての古文書講座②」を開催。講師：東俊佑

1月21日（日）
■連続講座「ちゃれんが地学講座③」を開催。
講師：圓谷昂史、**写真8**

1月27日（土）
■連続講座「はじめての古文書講座③」を開催。講師：東俊佑

1月28日（日）
■子どもワークショップ「博物館のなかで宝さがし」を開催。講師：舟山直治・池田貴夫、**写真9**

2月3日（土）
■連続講座「はじめての古文書講座④」を開催。講師：東俊佑

2月10日（土）
■第21回企画テーマ展「森のちゃれんが宝箱－スタッフイチ推しの収蔵資料や博物館活動を紹介する展覧会、いや、展乱会!?－」を開催（4月7日まで）。
■連続講座「はじめての古文書講座⑤」を開催。講師：三浦泰之

2月10日（土）～3月31日（日）の土・日・祝・振
■はっけんイベント「カラフル経木で『あじろコースター』を作ろう」をはっけん広場で開催。講師：解説員

2月11日（日）
■連続講座「ちゃれんが地学講座④」を開催。
講師：成田敦史

2月16日（金）
■総合展示クローズアップ展示、1テーマを展示入替。
⓪北広島市で新たに発見されたクジラ化石
①仙台藩石巻漂流民が見たロシア極東
－「環海異聞」をもとに－
②新しく仲間入りした歴史資料たち

2月17日（土）
■連続講座「はじめての古文書講座⑥」を開催。講師：三浦泰之
■連続講座　アイヌ語講座オンライン「アイヌ語の物語を読む⑤」を開催。講師：遠藤志保・吉川佳見

2月24日（土）
■連続講座「はじめての古文書講座⑦」を開催。講師：三浦泰之

2月25日（日）
■子どもワークショップ「ヒツジの毛にふれてみよう①初めての草木染め」を開催。
講師：会田理人

写真1

写真2

写真3

写真4

写真5

写真6

写真7

写真8

写真9

来館者数

○2023年12月～2024年2月
総合展示室　7,207人　特別展示室　2,253人　はっけん広場　1,122人
○累計（2015年4月～2024年2月）
総合展示室　819,163人　特別展示室　570,549人　はっけん広場　125,430人

森のちゃれんがニュース　第35号

発行日：2024年3月29日
編集・発行：北海道博物館
〒004-0006　札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657
ウェブサイト https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp
©Hokkaido Museum, 2024